

## 開会挨拶 済生会理事長 炭谷茂

済生会理事長の炭谷でございます。本日は第8回の生活困窮者問題シンポジウムに、休日にもかかわらずたくさんの方にご参加いただきましてありがとうございます。

済生会は、生活困窮者問題に取り組んでいるところですが、全国的に見ましてもこの問題はなかなか解決しない、いや、解決しないどころかますます深刻化していると思っております。

例えば、高齢者を見ますと、貧困な高齢者が都会の中でぽつんと孤立している状態、住んでいらっしゃる住環境もよくはない。そして、極端な場合は孤独死になってしまう。このようなことが全国的に起こっている。

一方、若者はどうかと見ると、最近のホームレス問題、たしかに野宿している人は、この金沢でもたぶん姿を見ることは少なくなったんじゃないかなと思います。しかし、じっと目を凝らして見ると、実際は事実上のホームレスの人というのはむしろ増えているんですね。これは何かと云ったら、野宿はしないけれども、ファーストフード店やネットカフェなどで夜を過ごす。これは、東京都の調査ではざっと見て 4,000 人と出ております。私はこの数字はちょっと低いんじゃないかなと思います。けれども、仮に 4,000 人、東京都は 10 分の 1 ですから日本には 4 万人、このような人がいるわけです。この方々も、日本の行政ではホームレスの扱いにしておりませんが、国際的な標準からいけばホームレスであります。

一方、家庭に入れば児童虐待、深刻な問題が次々起こっている。昔は児童虐待といえ、若いお母さん方が子育てに困って、つい子どもを育児放棄してしまうとか、こういう類が多かったんですが、いまは男性も虐待をする。そして、極端な場合は相手を死なせてしまうというような事例も起こっています。数え上げればきりがありません。むしろ、生活困窮に伴う問題は日本の社会の中ではどんどん深刻化している。私はそのように見えています。

この生活困窮者の問題、地域によって相当差があることは事実です。今日はこの石川県金沢市で開かれる、この地域ならではの問題があるろう、そして取り組んでいらっしゃるだろうと思っております。済生会、まさにこのような生活困窮者問題に取り組むことが、われわれの究極的な最大の目的であると取り組んでおります。

ともすれば、先ほど申したような生活困窮者の問題は、行政や他の団体はなかなか取り組もうとしない。済生会はいわば社会の最終ラインに残って、他の団体が逃げてもわれわれ

れは逃げない。例えば、瀬戸内海にはまだまだ無医村の島がたくさんあります。その島に対して、済生会は済生丸という診療船を巡航しております。

以前は広島県、岡山県、香川県、愛媛県も診療船を持って島々の診療にあたっていました。一つずつやめていきました。10年前ぐらい、香川県が最後に残りましたが、これもやめてしまいました。われわれはやめません。高齢者を中心として医療から取り残されている、そのような人たちに対して、毎年70の島々を回って診療を続けています。かつてはかんぼ、簡易保険の船もありました。これもやめてしまいました。このような状況によって、ただ唯一、われわれ済生会だけが診療船を運航しているわけです。

そのほか挙げれば、例えばこの石川県の済生会が大変力を入れていただいている元受刑者の支援、これは全国的に組織的で取り組んでいる団体は唯一われわれ済生会だけです。元受刑者の方々はなかなか社会復帰できない、社会の壁が厚い。これらの人に対して手厚い支援をしている。これはわれわれ済生会が全国的に行っている唯一の団体です。今後ともこのようなことを続けてまいりたいと思っております。

今日のテーマは「当事者主体の支援」ということに力点を置いているということですので、どうか最後までお聞きいただきまして、今後の皆様方の活動に生かしていただければありがたいと思っております。今日はやや長い時間ですがどうぞよろしく願いいたします。どうもありがとうございます。